

受賞作品

大航海時代の海域アジアと琉球

ーレキオスを求めて

中島 楽章 著

思文閣出版 630 ページ、9,500 円（税別）



書評

ヨーロッパ資料が裏付け

総合地球環境学特任教授 杉原 薫

本書は、14世紀後半から17世紀初頭までの琉球を「大航海時代」の海域アジア史のなかに位置づけた力作である。琉球史の基礎史料たる『歴代宝案』や中国史史料が朝貢貿易に関する情報に偏っているのを補うため、ポルトガル、スペインの史料やアラビア語の史料などを参照してその根拠を丹念に検討し、ヨーロッパが琉球を認識していく過程を明らかにした。

とくに、地図情報の検討から琉球に関連する東アジアの各地の呼称の変遷や認識の深化を総合的に示したのは、ヨーロッパの「世界認識」の歴史として意義がある。

また、その作業を琉球史、中国史の知見と突き合わせ、従来、琉球の中継貿易は15世紀前半をピークに衰退していくと考えられていたが、実際にはその後の100年間に福建との密貿易が成長し、マラッカなど東南アジア地域との貿易が多角化し、日本や朝鮮との貿易も拡大したと論じている。琉球は、明朝の朝貢・海禁体制を補完し、東シナ海と南シナ海を結ぶサブシステムの結節点であり続けたのである。

本書が復元した交易史の主人公はアジアの人々だが、使われているヨーロッパ系の史料は地震による消失、秘密主義と国外流出といった激動を経て、復刻と編集の膨大な努力で生き残ったものである。そうした情報の価値をアジア史から生まれた明確な問題意識によって掘り起こした作品だともいえるよう。